



TITLE:

表紙ほか

AUTHOR(S):

CITATION:

表紙ほか. 研究報告 2010, 24

ISSUE DATE:

2010-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/138558>

RIGHT:

研 究 報 告

第 24 号

公／私をめぐる価値観の交錯……………	西 尾 宇 広	(1)
—クライスト『ミヒャエル・コールハース』—		
博物学の夢想と冒瀆……………	土 屋 京 子	(21)
—E.T.A. ホフマンの『ハイマトカーレ』と『蚤の親方』—		
二人の女性と「子ども時代」の関係……………	藤 原 美 沙	(45)
—アイヒェンドルフの短篇『誘拐』より—		
カール・デュ・プレルの心霊研究における科学と発達……………	熊 谷 哲 哉	(63)
音楽的翻訳の可能性……………	池 田 あ い の	(79)
—ブロート、ヤナーチェク、カフカ—		
イメージ世界の観相学……………	宇 和 川 雄	(107)
—1931 年頃のベンヤミンのイメージ思考について—		
コインの亡命小説の風刺について……………	武 田 良 材	(141)
—長編小説『急行三等車』をめぐる議論を中心に—		

2010

京都大学大学院独文研究室

『研究報告』バックナンバー

第1号(1985)

- 大川 勇：ある深層の物語の読解 — ムー
ジルの『特性のない男』研究のための序説
金子 孝吉：リルケの詩『偶像』について
田辺 玲子：関係世界の創出 — アネッテ・
フォン・ドロステ＝ヒュルスホフの詩人像とそ
の世界
奥田 敏広：トーマス・マンの「モンタージュ技
法」について — 小説形式のパロディー

第2号(1986)

- 松村 朋彦：心理学と小説のあいだ — カー
ル・フィリップ・モーリッツ『アントン・ライ
ザー』とその周辺
大川 勇：千年王国を越えて — ムージルの
『特性のない男』における〈別の状態〉の行
方
加藤 丈雄：『公子ホムブルク』について — 死
の恐怖とその超越を中心に
奥田 敏広：リオン・フォイトヴァンガーの小説
『成功』におけるヒトラー像について — 20
年代の証言の一つとして

第3号(1988)

- 加藤 丈雄：ハッピーエンドと悲劇 — 『公子ホ
ムブルク』の多義性について
兵頭 俊樹：ヘルダーリンの‘Wie wenn am
Feiertage...’に現れるディオニュソスの形
象をめぐって
竹本 まや：トーマス・マンの『すげかえられた
首』試論
友田 和秀：『魔の山』試論 — 主人公ハンス・
カストルプの形姿をめぐって

第4号(1990)

- 津田 保夫：『ヴァレンシュタイン』試論 — ネメ
シスの悲劇の観点から

- 千田 春彦：フライダングの『ベシャイデンハイ
ト』研究のために — 三つの《はざま》をて
がかりとして
宮田 眞治：覚醒へ向けての夢想 — 『ハイン
リッヒ・フォン・オフターディンゲン』試論(1)
千田 まや：トーマス・マンの『ファウストゥス博
士』 — デューラーの機能についての一考
案
斎藤 昌人：一カフカ像 — 『流刑地にて』をめ
ぐって

第5号(1991)

- 青地 伯水：ホーフマンスタールの『厄介な男』
における「なおざりにされた生」と「達成され
た社会性」
谷口 栄一：C. F. マイアーの『ユルク・イエナッ
チュ』について — その多義性に関する一
考察
津田 保夫：後期シラーの悲劇論に関する一考
察 — 悲劇的恐怖の概念を中心に
斎藤 昌人：閉ざされる世界

第6号(1993)

- 片桐 智明：ヨーゼフ・ロートの『ラデツキー行進
曲』 — 「比較」と「繰り返し」のモチーフを
めぐって
千田 春彦：デア・シュトリッカーの『閉じ込めら
れた女房』について — 物語の重層構造
の目指すもの
福田 覚：自然模倣説における真理媒介の構
造(1) — レッシング〈詩学〉に潜在する模
倣説の輪郭
青地 伯水：W. ヒルデスハイマーの『リープ
ローゼ・レゲンデン』におけるグロテスクなも
のについての一考察

第7号(1994)

飛鳥井 雅友：「しばしばそれは絶望的な対話
なのです」 — パウル・ツェラーンにおける
対話の概念をめぐって

吉田 孝夫：時間の渦 — R・M・リルケ『新詩
集』の数篇から

片桐 智明：ヨーゼフ・ロートの『右と左』 — 二
つの方向

第8号(1995)

濱中 春：シラーの『マリア・ストゥアルト』 — 二
人の女王のドラマ

中村 直子：分離動詞の認定をめぐる諸問題

飛鳥井 雅友：神学の拒否と詩学 — パウル・
ツェラーンにおける神義論の問題

第9号(1996)

中村 直子：正書法と分離動詞

濱中 春：シラーの『ヴィルヘルム・テル』におけ
るスイスの風景

片桐 智明：ヨーゼフ・ロートの『百日天
下』 — ヨーゼフ・ロートのワーテルロー

飛鳥井 雅友：「胸は張り裂け」 — ゴットフリー
ト・ベンの場合

第10号(1997)

濱中 春：シラーの『逍遙』における風景をめぐ
って — 風景の補償モデルとその矛盾

吉田 孝夫：ローベルト・ヴァルザーにおける寓
話性(1) — 散文小品『通り(I)』について

片桐 智明：物語の行方 — ヨーゼフ・ロートの
『果てしない逃走』と『カプツィン派教会納骨
堂』をめぐって

第11号(1998)

吉田 孝夫：ローベルト・ヴァルザーにおける寓
話性(2) — 放蕩息子をめぐる二つの散文
小品について

片岡 宜行：ドイツ語の与格の分類について

國重 裕：クリスタ・ヴォルフ『クリスタ・T への追
想』について — その語りの構造

飛鳥井 雅友：ゴットフリート・ベンにおける〈抒
情的自我〉概念の登場をめぐって

第12号(1999)

片岡 宜行：ドイツ語の与格と空間補足語につ
いて

吉田 孝夫：ローベルト・ヴァルザーの絵画描写
について — エクブラシスの観点から

片桐 智明：ハイミート・フォン・ドーデラー四十
歳の小説 — 『最後の冒険』、騎士とドラゴ
ンの小説

KUNISHIGE Yutaka (國重 裕): Zwischen
Phantasiewelt und Wirklichkeit –
Essay über Ilse Aichingers „Die
größere Hoffnung“

第13号(1999)

KUNIEDA Naotaka (國枝 尚隆): *Wilhelm
Tell* als ästhetisches Projekt

吉田 孝夫：ローベルト・ヴァルザーにおける通
俗小説とメルヘンの再話について — 対
句法に関する試論

第14号(2000)

廣川 智貴：文体論の理論と実践 — クライス
トの『ロカルノの女乞食』を例にして

佐々木 茂人：カフカの作品における歌のモ
ティーフ — 『歌姫ヨゼフィーネ、あるいは
ネズミ族』を中心に

國重 裕：オーストリア小説に見る《家族ドラマ》
の変遷 — M.シュトレールヴィッツ『誘惑。』
(1996)

第15号(2001)

伊藤 白：『ブデنبロック家の人々』試論 — 「市民と芸術家」の生み出す四つの類型から

池田 晋也：アルトゥール・シュニッツラーの『自由への道』 — 市民的なものと芸術的なもののあいだを浮遊する生

川島 隆：カフカの息子たち — 短篇「十一人の息子」読解

中原 香織：ヘルマン・ヘッセの『シッダールタ』について — 葛藤の不在がもたらす問題をめぐって

羽坂 知恵：日常の「ヒーロー」 — ハイน์リヒ・ベルの『道化師の意見』について

第16号(2002)

佐々木 茂人：東方ユダヤ人難民とプラハのユダヤ人 — カフカの伝記研究のために

川島 隆：「こいつは途方もない偽善者だ」 — カフカの中国・中国人像

國重 裕：ユーゴスラヴィア内戦をめぐる西欧知識人の応酬 — ペーター・ハントケ『冬の旅』に対する議論を中心に

第17号(2003)

池田 晋也：描かれた劇場 — シュニッツラーの短篇『侯爵様御臨席』

伊藤 白：ゼゼミ・ヴァイヒプロート — 『ブデنبロック家の人々』における女性像とキリスト教

川島 隆：ユダヤ人と中国人 — カフカにおける人種と性愛をめぐって

武田 良材：クラウス・マンの『メフィスト』 — ドイツ反ファシズム運動の失敗の反映として

第18号(2004)

廣川 智貴：主語の文体論 — クライストの『決闘』を中心にして

熊谷 哲哉：言葉をめぐるたたかい — シュレーバーと雑音の世界

ASAI Maho (浅井麻帆)：Sehen im Wörterverbindungsraum bei Rainer Maria Rilke — Eine Wandlung vom Sehen hin zur Rose

川島 隆：『万里の長城』における「男性」と「労働」の位置 — カフカのシオニズム理解を手がかりに

伊藤 白：白いドレスのロッテ — トーマス・マン『ワイマールのロッテ』における女性像

武田 良材：道徳的な女たらし — ヘルマン・ケステン文学のモラリスト像

國重 裕：現代文学は「歴史」を語りうるか？ — Katrin Askan (1966~)に見るDDR 文学の現在

書評・文献紹介

第19号(2005)

青木 三陽：手紙を書く騎士 — 『パルツィヴァール』における「学識」と「書物」の意味について

樋口 梨々子：文学創作への萌芽としての音楽美学 — E.T.A.ホフマンの短編『ドン・ファン』試論

寺井 紘子：ホーフマンスタール文学における生と絵画

浅井 麻帆：ウィーン分離派館とヨーゼフ・マリア・オルブリヒ — 時代と分離派が求めた合目的性

熊谷 哲哉：結び目としての神経 — シュレーバーにおける宇宙と身体

池田 あいの：手紙論としての手紙 — カフカの恋文をめぐって

伊藤 白：ショーシャ夫人は美しいか — トーマス・マン『魔の山』における女性像と「東」

池田 晋也：ジャズアレンジされるヨーロッパ — ハンス・ヤノヴィッツの小説『ジャズ』

武田 良材：モラリストへの成長 — ヘルマン・ケステン文学のモラリスト像 その二

書評・文献紹介

第20号(2006)

- 青木 三陽： 歴史とフィクションの狭間で — ヴォルフラムの「原典言及」をめぐって
- 樋口 梨々子： E.T.A.ホフマンの『新旧の教会音楽』 — 「ロマン主義的なもの」との関連において
- 伊藤 白： フロイライン・エンゲルハルト — トーマス・マン『魔の山』における女性像と「同性愛」
- 廣川 香織： ハリー・ハラーの痛む足 — ヘルマン・ヘッセの『荒野のおおかみ』における身体について
- 池田 晋也： 文学的ジャズ表象の諸形態 — ブルーノ・フランクとフェーリクス・デールマン
- 武田 良材： モラリストの革命性 — ヘルマン・ケステン文学のモラリスト像 その三
書評・文献紹介

第21号(2007)

- 寺井 紘子： 芸術と芸術家 — ホーフマンスタールとリルケの場合
- 廣川 香織： 叶えられた理想と失われた身体 — ヘッセ文学の転換期における「顔」のモチーフについて
- 永畑 紗織： ヨハネス・ボブロフスキーにおける闇と光 — 『ねずみのおまつり』を中心に
- ヴェレーナ・ルツチュマン(川島隆 訳)： たくましい少女たち、繊細な少年たち — ヨハンナ・シュピーアの児童文学作品について
書評・文献紹介

第22号(2008)

- 土屋 京子： プロメテウスの火と E.T.A.ホフマンの『G.町のジェズイット教会』
- 藤原 美沙： 子どもへ向ける視線 — アイヒェンドルフの2篇の詩より
- YAMAZAKI Asuka (山崎 明日香)： Das Verschwinden der Differenzierung in der Todesgemeinschaft in Richard Wagners *Tristan und Isolde*

- 浅井 麻帆： 「セセッション」から「分離派」へ — 日本の Wiener Secession 受容史における訳語の変遷について
- 武田 良材： アンネマリー・シュヴァルツェンバハにおける反ナチス — エーリカ、クラウド・マン、そして山との関係
- 永畑 紗織： 異教の神ペルーンとサルマチア — ボブロフスキーの短編『異教徒たちの至福』について
- 菅 利恵： ドイツにおける「ドイツ — トルコ」二言語教育 — 複言語主義とドイツ語教育のはざままで
- BID(伊藤白 訳)： 『図書館が良い21の理由』
書評・文献紹介

第23号(2009)

- 菅 利恵： 愛による主体化 — シラーの劇作品をめぐる試論
- 土屋 京子： 言語起源論と E.T.A.ホフマンの動物 — 犬ベルガンサ、猿ミロと猫ムルの言語をめぐって
- 藤原 美沙： 詩人と「子ども」の関係について — アイヒェンドルフの小説『詩人とその仲間』より
- YAMAZAKI Asuka (山崎 明日香)： Die Widerspiegelung des zeitgenössischen Englandbildes durch Tristan in Richard Wagners *Tristan und Isolde*
- 加賀 ラビ： ホーフマンスタールの『アルケステイス』について
- 武田 良材： オリエントでの自分探し — アンネマリー・シュヴァルツェンバハの『幸せの谷』
- 永畑 紗織： 境界に立つショーペンハウアー — ボブロフスキーの短編『窓辺の若い紳士』について

INHALT

NISHIO Takahiro :

Die Kollision von öffentlichen und privaten Werten

— Heinrich von Kleists *Michael Kohlhaas* (1)

TSUCHIYA Kyoko :

Träume und Frevel der Naturkunde

— Über E.T.A. Hoffmanns *Haimatochare* und *Meister Floh* (21)

FUJIWARA Misa :

Die Verbindung zwischen zwei Frauen und ihrer Kindheit

— Überlegungen zu Eichendorffs Novelle *Die Entführung* (45)

KUMAGAI Tetsuya :

Wissenschaft und Entwicklung des Spiritismus bei Carl du Prel (63)

IKEDA Aino :

Die Möglichkeit der musikalischen Übersetzung

— Brod, Janáček, Kafka (79)

UWAGAWA Yu :

Die Physiognomik der Bilderwelt um 1931

— Zum Bilddenken Walter Benjamins (107)

TAKEDA Yoshiki :

Wie satirisch sind die Exilromane von Irmgard Keun?

— Betrachtungen zu ihrem Gesamtwerk, vor allem *D-Zug dritter Klasse* (141)

執筆者

池田 あいの	(京都大学非常勤職員)
宇和川 雄	(日本学術振興会特別研究員(DC1))
熊谷 哲哉	(京都精華大学助手)
武田 良材	(京都大学非常勤講師)
土屋 京子	(京都大学大学院博士後期課程)
西尾 宇広	(京都大学大学院博士後期課程)
藤原 美沙	(京都大学大学院博士後期課程)

研究報告 第24号

非売品

2010年12月発行

発行所 京都大学大学院独文研究室 研究報告 刊行会

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学文学部内

Tel 075-753-2826

郵便振替 01060-2-38520

印刷所 北斗プリント社

〒606-0864 京都市左京区下鴨高木町 38-2